彙　報

国際学会ニュース
News of International Conferences

第11回国際モンゴル学者大会「モンゴル研究と持続的発展」
（2016年8月15日～18日、ウランバートル）報告
The 11th International Congress of Mongolists “Mongol Studies and Sustainable Development”
under the Patronage of the President of Mongolia Tsakhiagiin Elbegdorj
（15-18 August 2016, Ulaanbaatar, Mongolia）

全体報告

二　木　博　史（東京外国語大学）
FUTAKI Hiroshi（Tokyo University of Foreign Studies）

2016年8月15日から18日の日程で、第11回国際モンゴル学会（モンゴル語で*Olon Ulsiin Mongolch Erdemtnii XI Ikh Khural*）がモンゴルのオラーンバータルで開催された。5年ぶりの開催である。国際モンゴル学会は、民主化後はモンゴル大統領の後援のもとにひらかれており、今回も開会式（8月15日）は政府中央庁舎の大ホールでおこなわれ、Ts.エルベグドルジ大統領が祝辞をのべた。首相J.エルデネバトのあいさつのあと、K.ザガスター会長のあいさつが代読された。科学アカデミー副総裁D.レグデルのスピーチにつづき、リンチン記念賞の授賞セレモニーがおこなわれ、Ts.シャグダルスレン、L.マナルジャブ、E.プレブジャブの諸氏が受賞した。

基調報告はふたつあり、最初のはG.チョローンバータル、D.トゥムルトゴー「モンゴル研究と持続的発展」だった。このテーマは、今度の大会のメインテーマでもある。もうひとつの基調報告はC.アトウッド「モンゴル秘史はいかにかかれたか」。

この日（8月15日）の午後には政府中央庁舎のなかで各部会の基調報告がおこなわれ、翌日からは会場をうつして個別の発表がなされた。第1部会「モンゴル言語学研究（Studies on Mongolian philology）」、第2部会「モンゴル史研究（Studies on Mongolian history）」、第3部会「モンゴル文化・文学研究（Studies on Mongolian culture and literature）」、第4部会「モンゴルの対外関係の研究（Studies on Mongolian foreign relations）」、第5部会「モンゴル社会・経済研究（Studies on Mongolian society and economy）」という5部会にわかれたが、それぞれの部会での発表については、各部会報告を参照されたい。大会の際に配布された、国際モンゴル学会の歴史をまとめたパンフレットによれば、今回の大会には29か国の400名の学者が発表するとかかれているが、最終的な正確な数字は確認できていない。なお、やはり大会のときに配布されたサマリー集には計276の要旨がおさめられている。

今回は、モンゴル経済の悪化という状況のなかで、モンゴル政府からの経費支出の決定がおくれ

たために、会員に対する開催の通知がおくれるなど、準備が順調ではなかったが、無事に開催できたことは、さいわいだった。国際モンゴル学会、大統領府など全12団体の共催というかたちをとり、協賛団体としてふたつの組織がくわわった。

大会は全体として、モンゴル研究の最新の成果を発表する場、研究者が直接情報を交換する場、通常のルートではえがたい出版物を入手する場を提供する役割をはたしたので、それぞれの参加者にとって参加の意義はおおきかったとおもわれる。他方、大会の運営上の問題点として参加者から指摘されたのは、部会の会場が相互にはなれていて、不便であったという点である。前回まではモンゴル国立大学を会場にすることがおおかったが、今回はモンゴル国立大学以外に、国立芸術大学、国立教育大学、モンゴル日本センターでも部会がおこなわれたため、自分の属する部会をはなれて他の部会にききにいくのがむずかしかった。これは、共催した芸術大学や教育大学の立場が考慮された面もあるとおもわれるが、参加者のがわからすると相当に不便であった。

8月18日午後の閉会式では、国際モンゴル学会の新執行部が発表された。まずK.ザガスター会長（ドイツ）の後任として、ハンガリーのビルタラン・アーグネシュ教授が選出された。これまでの会長は、一線をしりぞいた高名なモンゴル研究者が、いわば象徴的につとめる、というものだったが、ビルタラン氏は現役で精力的に研究活動をおこなっているので、会長の性格がややかわる可能性もある。とはいっても、オラーンバータルにおかれた学会事務局のトップである事務局長が学会の運営をになうというスタイルは基本的にかわらないと予想される。その意味で、D.トゥムルトゴー教授の後任として新事務局長に選出されたS.チョローン氏（科学アカデミー歴史学・考古学研究所長）が、どの程度、あたらしい方向性をだしていくのか、たいへん注目される。おそらくは、D.トゥムルトゴー教授があらたにはじめた、テーマをしぼった国際学会の開催が、今後さらに活発におこなわれるのではないかとおもわれる。副会長として、B. V. バザーロフ（ロシア）、オヨーンビリグ（中国）、小長谷有紀（日本）、C.アトウッド（アメリカ）、S.トゥムルオチル（モンゴル）、U. E.ボラグ（イギリス）の計6名の選出が発表されたが、チョローン氏とちかいかおぶれであり、チョローン体制の誕生を確認できる。

第一部会（語学・文献学研究 1）

山　越　康　裕（東京外国語大学）
YAMAKOSHI Yasuhiro（Tokyo University of Foreign Studies）

第一部会「モンゴル語学・文献学（Монгол хэл бичиг судлал）」は、モンゴル国立大学第1校舎の学術ホール（Эрдмийн танхим）および208号室にて行われ、初日の基調講演Л. Болд（モンゴル国）*Монгол хэл шинжлэлийн түүхийн үечлэлийн асуудал*「モンゴル語研究における歴史区分に関する問題」; Д. Заяабаатар（モンゴル国）*Монгол хэл судлалын өнөөгийн байдал, асуудал, шийдэл*「モンゴル語研究の現状・課題・展望」）を含め、延べ14ヶ国、79名による研究発表が、セッションごとに組まれたプログラムに沿って行われた。セッションテーマは「モンゴル秘史研究」「文字・文献研究」「歴史・

比較言語学」「辞書学・翻訳研究」「語彙論・語源研究」「文法研究」「音韻論・方言研究」「言語文化・社会言語学・文化と社会」の8つであった。日本からは以下5名の研究発表があった（プログラム掲載順、敬称略）。

中嶋善輝（大阪大学）*Монгол хэлний нохойтой хамаатай гурван үгийн гарал үүслийн тухай*「モンゴル語の「犬」に関連する3つの語の起源に関して」（語彙論・語源研究セッション）

呉人徳司（東京外国語大学AA研）*Some Questions of Caustative and Passive in Korchin Dialect of Mongolian*；山越康裕（東京外国語大学AA研）*Монгол төрөл хэлнүүдийн "гишүүн бус өгүүлбэр"*「モンゴル諸語の「脱従属文」」；山田洋平（東京外国語大学大学院生）*Дагуур хэлний цагийн ай*「ダグール語の時制」（以上、文法研究セッション）、松川節（大谷大学）*On the Mongolian Expression "yeke suu jaliyin ibegen-dur" in the Initial Formula of the Edict of Grand Khan of Yuan Dynasty*（言語文化・社会言語学・文化と社会セッション）

報告者は主に「文法研究」「音韻論・方言研究」を中心に参加した。初日のЗаяабаатар氏による基調講演では、（モンゴル国における）モンゴル語を対象とする言語学のレベルアップのために、海外の研究機関とモンゴル国科学アカデミー、モンゴル国立大学との共同研究が必要であるという主張がなされていたことに象徴されるように、モンゴル語研究は近年、停滞状況におかれている。これを反映するかのように文献研究以外の言語学的研究に関する発表が少なかった点が印象に残った。「文法研究」セッションは日本から3名（呉人、山田、山越）の発表があったが、全体で9本とやや少なかったうえ、モンゴル国の若手研究者の発表がこのセッションでは1本も無かった。「音韻論・方言研究」セッションではモンゴル語の母音調和を類型的に分析したJuha A. Janhunen（フィンランド）*Mongolian Vowel Harmony in a Eurasian Context*や、ヨーロッパ各地に残る資料に見られるオイラト語の特徴について報告したRákos Attila（ハンガリー）*Some Features of the Oirat Dialect on the basis of the 17-19th Century European Sources*といった非常に興味深い論考もあったが、こちらも基本的には文献研究を基盤とする発表が多く、近年中国領内で盛んとなっているフィールドワークに基づいた方言の調査研究といった内容のものは無かった。

ただし文献研究に関してはモンゴル国内外問わずВероника Капишовска（チェコ）*Монгол хэлэнд орсон гадаад үгийн судалгаа*「モンゴル語に借用された外国語に関する研究」のような堅実な発表が目立った。また、大会終了後に「国家術語委員会（Улсын нэр томъёоны комисс）」が復活したことにも関連するのか、О. Самбуудорж（モンゴル国）*Орчин цагийн монгол хэлний үгийн сангийн хувьсал өөрчлөл*「現代モンゴル語語彙の変遷」ほか、語彙論・語源研究に関する発表（8本）が多かったのも印象的であった。

第一部会（語学・文献学研究 2）

松　川　　節（大谷大学）
MATSUKAWA Takashi（Otani University）

8月16日の「モンゴル秘史研究」セッションでは、Ш. Чоймаа（モンゴル国）*“МНТ”-ны хэлийг сонгодог монгол бичгийн орчуулгаар тодлох нь*「『モンゴル秘史』の言語の古典期モンゴル文語訳による確定」、Бүрэнбат（中国）*Монголын Нууц Товчооны тэмдэглэлийг нарийвчлан шинжлэх асуудалд*「モンゴル秘史の記述の研究における問題」、Э. Пүрэвжав（モンゴル国）*Монголын нууц товчоон судлал ба профессор Нака Мичиё*「モンゴル秘史研究と那珂通世教授」など5本の発表があった。続く「文字・文献研究」セッションでは、Л.Маналжав（モンゴル国）*Зүүн Азийн хэл соёлын харилцааны жишээ: Нуголдай*「東アジア言語文化交流の一例：ノゴルダイ」、И Сон Гюү（韓国）*Кидан бага үсгийн «l» гийгүүлэгчийн авиалбар шинжийн тухайд*「契丹小字の1子音の音韻的特徴について」、Otgon Borjigin（中国）*Some Remarks on Page Fragments of a Mongol Book of Taoist Content from Qaraqota*「ハラホト出土モンゴル語道教文献断片について」、Gaowa（中国）*Overview of the Multilingual Inscriptions in Qing Dynasty: and Studies on Them*「清代多言語碑文概観及びその研究」など5本の発表があった。マナルジャブの発表は、13～14世紀東アジアにおける漢児言語、旧本『老乞大』、蒙文直訳体などに注目したもの。オトゴンの発表は、ハラホト出土モンゴル文書HF125d, c, b, a の解読研究。ゴワの発表は、清朝時代に造られたモンゴル語を含む多言語碑文の全体像を提示するものであった。いずれもモンゴル語文献を東アジアという広い言語環境の中で扱っており、新たな研究潮流と見受けられた。

8月18日の「言語文化・社会言語学・文化と社会」セッションでは、Чойжинжав（中国）*Монгол бичгийн кодод монгол бичгийн уламжлалыг тусгах нь*「モンゴル文字コードにおけるモンゴル文字伝統の反映」、Legrand Jacques（フランス）*Some observations about the Mongolian language general system in connection with Mongolian nomadic society and culture*「モンゴル遊牧社会文化との関連におけるモンゴル語普遍システムについての考察」、Хэшигтогтох（中国）*Монгол үсэг бичгийн үүслийн тухай*「モンゴル文字の起源について」、Б.Сумьяабаатар（モンゴル国）*Их хориг тийш хөтлөх бичээс*「イフ・ホリグに導く銘文」、松川節（上述）など10本の発表があった。スミヤーバータルの発表は、衛星写真に映る “Хаан тэнгэрийн хөвгүүд” という内容の地上銘文に言及するほか、チンギスハーンに関する様々な文献資料を紹介するものであった。

第二部会（歴史研究）

青　木　雅　浩（東京外国語大学）
AOKI Masahiro（Tokyo University of Foreign Studies）

モンゴル史研究をテーマとする第2セッションには、モンゴル国、ロシア、日本等15か国から76

人の報告者が参加した。基調報告は政府庁舎チンギス・ハーン・ホールで行われ、各部会はモンゴル国立大学第1号館330教室及び320教室で開催された。

紙幅の制限があるため、日本からの参加者の報告を中心に各部会を紹介する。8月15日の会議では、Ц. トゥルバト、Ю. И. エリヒナが議長を務め、C. チョローンとБ. В. バザロフによる基調報告が行われた。その後、16—18日の3日間で全8部会が催された。「モンゴル考古学研究とモンゴル人の民族起源」部会（16日）では15件の報告が行われた。「モンゴル人と中央アジア世界」部会（16日午前）では、岡洋樹「The Accomplice is my Acquaintance: Cross Border Bonds of Mongolians Observed in the Thievery Cases in the Eighteenth Century」、前野利衣「Seventeenth Century's Borjigin Priests of the Right Wing Qalqa and Their Political Role」を含む9件の報告が行われた。「モンゴル民族学とモンゴルの民族構成」部会（16日午後）では報告7件が行われ、島村一平「What's Behind A Pandemic of Shamans? The overturning of Social Relationships and the Diverging of Morality in Contemporary Mongolian Shamanism」が報告された。「モンゴル帝国、その世界に果たした役割」部会（17日）では15件の報告が行われた。「モンゴル現代史研究と史料」部会（17日午前）では、ボルジギン・フスレ「Activities of the Inner Mongolian People's Revolutionary Party after 1928」、青木雅浩「Хаалганы хэрэг явдал ба Ринчино, Рыскуловын тэмцэл（1924-1925）」を含む7件の報告がなされ、「歴史叙述、文献研究の現状と傾向」部会（17日午後）で8件の報告が行われた。「モンゴル出版史」部会（18日午前）では、フフバートル「The study of Mongolian periodicals and their place in the modern history of Mongols」、広川佐保「Khalkha Mongolia in Inner Mongolian Perspective」を含む5件の報告がなされた。「モンゴル人の地名・地図研究」部会（18日午前）では、二木博史「Contradictions between Official Document's Descriptions and Local Pastoralist's Interpretation of the Borders in the Cases of Khalkha and Khölönbuyir」、上村明「Монголын хошуу нутгийн зургийн хувьсал, дүрслэлийн өөрчлөлт」を含む7件の報告が行われた。18日午後は、会場をモンゴル国立大学第1号館2階円形教室に移し、書籍*Монголын археологийн үнэт өв*の紹介が行われた。その後、セッション総括会議が行われ、第2セッションは無事全てのプログラムを終えた。

会場は絶えず多くの人が出席しており、常に盛況であった。今大会の歴史研究セッションの特徴として、2つの点を挙げたい。まず、パワーポイントを用いた報告が主流になる一方、報告でレジュメが配布されないことが多くなった。セッション会場では多量のレジュメを刷ることが困難であるため、この傾向が進むのはやむを得ないと思われる。第2に、英語の使用が広まりつつあるように感じた。英語による報告はもちろん、報告自体はモンゴル語によるものでも、プログラム上の報告タイトルだけは英語であるケースも多数見受けられた。参加者の国籍が多様になりつつあることから、今後も英語の使用はますます進むことと思われる。

第三部会（文学研究）

岡　田　和　行（東京外国語大学）
OKADA Kazuyuki（Tokyo University of Foreign Studies）

第3部会「モンゴル文化・文学研究」は、プログラム記載順に「開会式・基調講演」「口承文芸・古典文学研究」「文学研究」「宗教研究」「文化研究」「芸術研究」「口承文芸研究」の7つの分科会に分かれていた。8月15日（月）午前、政府庁舎の大会議室で開催された大会開会式に引き続き、中会議室で午後開催された第3部会開会式では、モンゴル科学アカデミー正会員D.ツェレンソドノム（D.Tserensodnom）博士の「モンゴル叙事詩研究の方法論の問題について」とモンゴル国立文化芸術大学のE.ソニントゴス（E.Sonintogos）学長の「モンゴル文化芸術研究の展望と発展方針」という2本の基調講演が行われた。8月16～18日の3日間は、会場をモンゴル国立文化芸術大学に移して各分科会が行われた。（以下、敬称略）

口承文芸･古典文学の分野の主な発表には、モンゴル国立文化芸術大学のS.ドラム（S.Dulam）の「掛け合いの口演“Асуух нурууны үг”は口承文芸の起源に関係する」、西北民族大学のセツェンムンフ（Setsenmunkh）の「モンゴル昔話の類型研究とデータベースの構築」、ロシア国立人文大学のツェンディーナ・アンナ（Tsendina Anna）の「Ts.ダムディンスレン博物館所蔵のいくつかの稀覯本について」、モンゴル国立教育大学のS.フブスグル（S.Khuvsgul）の「Ts.ダムディンスレンの用いた『月郭公伝』の写真版の手稿について」、ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究所のL.S.ダンピロワ（L.S.Dampilova）の「チュルク=モンゴル民族の神話における変身の象徴的意義」、モンゴル科学アカデミー言語文学研究所のB.カトー（B.Katuu）の「モンゴル叙事詩における定型語句について」、トゥバ共和国人文科学研究所のマルガリータ・クンガー（Margarita Kungaa）の「『ゲセル物語』に起源を持つトゥバの昔話の内容構成の特徴について」、そして国際教養大学の金岡秀郎（H.Kanaoka）の「昔話『狡猾な老人（Аргат өвгөн）』と落語『算段の平兵衛』の類似性について―モンゴルと日本における口承滑稽話」などがあった。

近代文学の分野の主な発表には、国立ウランバートル大学のD.ツェデブ（D.Tsedev）の「20世紀モンゴル文学における作家の筆名について」、北京大学の王浩（Wang Hao）の「啓蒙と建設―モンゴル人学者Ts.ダムディンスレンの人文主義的な価値の探究」、サンクトペテルブルグ大学のM.P.ペトロワ（M.P.Petrova）の「21世紀のモンゴル長編小説」、モンゴル科学アカデミー言語文学研究所のS.バイガルサイハン（S.Baigalsaikhan）の「映画作品『ツォクト・タイジ』における歴史と芸術の関係―民族主義反映問題再論」、中央民族大学のワンマンドガ（Wang Manduga）の「M.ヤダムスレンの中編小説『三人娘』における芸術形象の探究」、カルムイク国立大学のS.N.ツェデノワ（S.N.Tsedenova）の「近代カルムイク詩におけるモンゴル的なテーマ」、そして岡田和行（K.Okada）の「『モンゴル革命作家グループ』について」などがあった。

なお「宗教研究」と「文化研究」の分科会については他の報告者が担当しているが、言及されていない日本人の発表としては、「芸術研究」分科会で総合研究大学院大学博士後期課程の八木風輝（F.Yagi）の「ジャンルの混淆した『民謡』―モンゴルのカザフ人の歌曲公演の事例から」があった。

第三部会（宗教研究）

井　上　岳　彦（日本学術振興会）
INOUE Takehiko（Japan Society for the Promotion of Science）

「宗教研究」分科会は、第三部会「モンゴル文化・文学研究」の一分科会として、8月16日の午前の部・午後の部にわたって開催された。それぞれコーヒーブレイクを挟みながら、午前に9の研究発表、午後に11研究発表がおこなわれた。日本からは、以下3名による研究発表があった（発表順、敬称略）。

藤井真湖（愛知淑徳大学）“Өнөө үеийн овоо тахилгын тухай-Өвөр монголын зарим жишээн дээр өгүүлэх нь.”、井上岳彦（日本学術振興会）“Kalmyk Impacts on Tibetan Buddhist World in the Late XIX – Early XX Century.”、都馬バイカル（桜美林大学）“Шведийн Монгол мишшоны（шашны бүлгэм）.”

分科会出席者の勤務地は多岐にわたり、モンゴル、日本、ロシア、オーストラリア、韓国、ルーマニア、中国、イギリス、ハンガリーであった。また、発表言語はモンゴル語、英語、ロシア語が使用された。さらに発表内容も寺院史、オボー儀礼、寺院教育、在家信者コミュニティ、医療実践、医療史、シャーマニズム、文献学、仏教学史、キリスト教宣教史など様々で、研究手法も文献研究から映像人類学まで多様だった。

このうち、とくに報告者の印象に残ったのは、動画を有効に利用した発表だった。例えば、Choi Fuyo, “Trans-border Master-Disciple Network of Shamanism: A Case Study of the Revitalization of Shamanism in Eastern Mongolia, China.”などの研究発表である。先に述べたように、「宗教研究」分科会は研究対象物や研究対象地域がさまざまで、研究手法もおおきく異なるため、ややもすれば研究者が相互に理解できないままに会議が終了しがちである。近年、飛躍的に撮影機器や記録媒体の性能が向上し、写真のみならず動画として研究対象を保存することが容易になった。撮影方法や見せ方、説明の仕方など工夫すべき点は多々あるだろうが、今後ますます動画の重要性は高まると思われる。

また報告者個人は初めての大会参加だったが、多言語対応の発表方法の必要性を痛感させられた。会議の使用言語はモンゴル語、英語、ロシア語だったが、口頭発表の言語とスライドの言語を別にするなどの工夫が必要であることが分かり、そのような点においても非常に勉強になった会議だった。

第三部会（文化研究）

木　村　理　子（東京外国語大学）
KIMURA Ayako（Tokyo University of Foreign Studies）

8月17日（水）の「文化研究」セッション午前の部（9:00-12:00）の発表討議はモンゴル国立文化芸

術大学第一棟の学生劇場にて開催された。前半最初の発表は、モンゴル国のJ.Tsezen氏による17-19世紀のモンゴルの出版物目録に関する研究発表であった。続いて、ロシアのKulganek Irina Vladimirovna氏によるロシア国内のアーカイブに存在するモンゴル関連資料についての分類別報告発表があり、続いての発表は、日本の木村理子によるチャムの起源考察とモンゴルのツァムの特色に関する発表であった。続く、ロシアのKitinov B.U氏による発表は、ロシア国内の学校教育におけるモンゴル文化関連授業の充実を訴えるものであり、前半最後の発表は、モンゴル国のJ. Saruulbuyan氏によるボルハン・ハルドゥンに関連しての、オリヤンハイがチンギス・ハーンの聖地を守り続けてきたことに関する発表であった。休憩後の後半は、ロシアのAlevtina Soloviyava氏による「相撲の木Bökh Mod」に関する発表から始まり、アルハンガイやバヤンホンゴルには力士が両手を広げて舞う姿に似た形状の樹木があり、その傾く方角から強い力士が誕生するといった伝説の存在に関する報告がなされた。続いて、ドイツのSchmitt Garibaian Wolfgang氏によるミュンヘンの図書館に収蔵されているモンゴル関連文献についての報告発表があり、続く、韓国のLee Sun A氏による発表は、モンゴルのゲセル神話と韓国のDangun神話との比較であり、両神話の宇宙空間の類似性は、須弥山思想によるものとの指摘がなされた。午前の部最後の発表は、ロシアのSyrtypova Surun氏によるモンゴルの菩薩像の造型美や模様に関するものであり、遊牧民の暮らしとも関わる自然や動植物が表象されているとの指摘がなされた。午前の部の質疑応答は各発表後に行なわれ、モンゴル国のS.Dulam氏による補足説明や質問の数々は大いに参考になるものであった。続く、午後の部（14:00-18:00）は312号室で実施され、発表予定者9名のところ、3名不在であり、発表者は6名であった。前半最初の発表は、ルーマニアのRodica Pop氏による結婚式に関するものであり、モンゴル国民の結婚式は欧米化してきており、伝統儀礼としてはハタグを捧げる儀式のみが見られるといった指摘がなされた。続いて、内モンゴルのHurilesha氏によるフレー・ホショーの自然や文化の特色に関する発表があり、遊牧民の暮らしや文化が定住化や近代化により変化してきている状況について報告がなされた。続いて、モンゴル国のJ.Enebish氏による馬頭琴諸伝説に関する発表があり、諸伝説いずれにも、愛馬の供養追福を目的とした馬頭琴製作の経緯が記されてあり、夢のお告げと翼を付けた愛馬が天を駆ける神話の世界観が含まれるといった指摘がなされた。続いての発表は、モンゴル国のD.Davaasuren氏によるウブルハンガイ県ハラホリン郡シャンハの地主神の仏画に関するものであり、遊牧民の暮らしと土着の信仰の特色を含む、モンゴル仏画の伝統に則った色彩の区別がなされた作品になっているとの指摘がなされた。休憩後の後半は、モンゴル国のL.Dashnyam氏による輪ダンスの発表から始まった。古代モンゴルで輪ダンスが行なわれていたことを示す壁画の紹介があり、輪ダンスは身体技法であり、現代人にも輪ダンスの習慣が必要との見解が述べられ、モンゴルの若者達が輪ダンスを楽しむ映像とともに輪ダンスの普及が呼びかけられた。続いて、モンゴル国のB.Purevsuren氏による発表は、現代小説家G.Ayurzana氏の新作『天の経典Tengeriin sudar』について紹介しつつも、今なぜモンゴル人にとって「天」なのか、そもそも「天」という概念とは何かに着目し、「天」という概念の研究の必要性についてあらためて考える機会を提起しようとするものであった。午後の部の質疑応答は前半と後半にまとめて行なわれ、熱のこもった活発な意見交換が行なわれた。

第四部会（対外関係研究）

湊　　邦　生（高知大学地域協働学部）
MINATO Kunio（Faculty of Regional Collaboration, Kochi University）

第四部会は「モンゴルの対外関係」とのテーマの下で行われた。初日は政府宮殿内にて「文明とモンゴルの対外関係（18～20世紀初頭）」と題する開会セッションを挙行、バヤサフ部会長をはじめ3名の基調講演が行われた。翌日からはモンゴル・日本センターを会場として、開会セッションと同じ「文明とモンゴルの対外関係（13～20世紀初頭）」をはじめ、「文明とモンゴルの対外関係（20世紀）」「N.K.リョーリフ中央アジア・モンゴル調査旅行90周年記念分科会」「国際関係と地域安全保障」「世界のモンゴル研究」「モンゴル人の民族性」という分科会がそれぞれ行われた。一部並行して行われた分科会もあり、筆者はそのすべてに出席したわけではないが、プログラムには83件の報告が記載されている。ただし、当日欠席者や飛び入り報告者が出たため、実際の報告件数は異なり得ることをお断りしておく。

本部会において筆者が注目した点を5つ示しておきたい。第1に、近現代モンゴルの対外関係にとどまらず、多様な時期を対象とする研究発表が幅広く含まれている点が挙げられる。これは分科会のタイトルからも明らかであろう。歴史的な視点の提供は、対外関係研究が近視眼的なものに陥ることを避ける上で重要であるが、一方でモンゴルが現在直面する対外関係上の課題に対する研究があまり見られなかった感もある。

第2に、今回のプログラムではロシア語による発表が15件含まれていた。比率としては過去の大会よりも低下したのであろうが、この種の研究では英語が国際言語として主流になる中で（筆者も英語で発表を行った）、むしろロシア語が今も存在感を発揮しているように筆者には感じられた。

第3に、発表においてはPowerPointを使用する発表者（筆者含む）と、用意した原稿を読み上げる発表者が混在していた。後者の発表形式でも、原稿をコピーして配布する発表者と資料なしで読み上げる発表者に分かれた。日本国内、あるいは国際学会ではPowerPointの使用が当然となりつつあるが、こと本会議においては過渡期的状況のようであった。

第4に、最終日は予定より早く全報告が終了したため、午後に予定されていた全体討論を午前中に切り上げて実施したが、その中でモンゴル研究の現状に対する危機感が話題となった。とりわけ若手研究者の参入が少ないこと、研究者への支援不足等が問題点として指摘された。

第5に、本部会で日本の研究機関から研究発表を行ったのは筆者含め5名であり、上記の全体討論に参加した日本人研究者は、私が見た限り筆者のみであった。参加者の研究領域や関心を考慮すれば仕方のない面はあるが、日本のモンゴル研究が存在感を発揮できなかったのは残念であった。

最後に、本部会に限らない全体的なものとして、事前準備ならびに運営上の諸問題は指摘せざるを得ない。事前告知が大会数日前まで行われなかったことや、各部会の会場が拡散しており、他部会の研究発表を聴きに行くことが困難であった点に加え、筆者含め一部参加者にはインビテーションが事前に届かず、会場入場まで長時間待たされる例や、帰国の際に依頼していた送迎が来ないといったトラブルも見られた。これらについては次回に向けて改善を要望したい。

第五部会（社会・経済研究）

辛　嶋　博　善（国立民族学博物館）
KARASHIMA Hiroyoshi（National Museum of Ethnology）

初日に政府庁舎内で行われた基調講演では、D.ムンフジャルガル、A.オユントンガラクにより、共通テーマである持続可能な発展に関する講演が行われた。持続可能性についての理論的考察やゴミ問題などの現代的な問題が取り扱われた。また、T.ドルジ氏がチンギスハーンによる組織を題材とした講演を行った。

2日目以降、本部会はモンゴル教育大学第1校舎300号室、200号室を会場として行われた。本部会は4つのテーマに発表者が振り分けられた。「経済展望、傾向と挑戦」、「モンゴル国の政治と法」、「モンゴル社会の変化と傾向」、「モンゴル人の宗教と哲学的視点・思考」の4つであるが、学問領域としてみれば、経済学、政治学、法律学、歴史学、社会学、文化人類学、宗教学、哲学など多岐にわたるものであった。合計66の発表がプログラムに登録されていた。特に多かったのは「モンゴル社会の変化と傾向」（プログラムにエントリーされていた発表数29）、次いで「経済展望、傾向と挑戦」（同17）であった。ただし、いずれのテーマにおいても発表者の欠席や発表順の変更が見られたようで、空いた時間を質疑応答に時間を当てる場面も見られた。

本部会での日本人発表者は以下の通りである（プログラム順、敬称略）。八尾廣（東京工芸大学）“A Proposal for the Improvement of the Detached Houses and Living Environment of the *Ger* Area, Ulaanbaatar.”、松宮邑子（明治大学）“A Study on Expansion of *Ger* Areas in Ulaanbaatar.”、今岡良子（大阪大学）“2050 он гэхэд Монгол улс НҮБ-ын Биологийн олон янз байдлын конвенцийн зорилгыг хангах анхны орон болох боломжтой.”、萩原守（神戸大学）“The Time Limit of Arresting Criminals in Mongolia during Manchu Qing Period.”、辛嶋博善（国立民族学博物館）“Collision and “The Point of Compromise” in a Mongolian Pastoralists’ Society.”

最終日のクロージング・セッションでは、参加した研究者がそれぞれ感想や意見を述べたが、先述したように社会の変化にかんする発表が多数を占めたことからも分かるように、近年のモンゴル国の経済状況に起因する変化が大きな関心を占めていた。また、上述の日本人によるゲル地区の発表に言及しながら、成果の社会への還元について提起する意見も見られた。

ロシアを始めとする外国人研究者が多数を占め、モンゴル人研究者は少数であった。そうした中でも、若手のモンゴル人研究者の発表には、欧米の学説や研究者への言及や近年の学問的潮流に沿った研究が見られたことが印象的であった。この分野でも若いモンゴル人研究者と外国人研究者との交流が着々と進み、その成果が既に開花しつつあると感じさせるものであった。

第二回国際モンゴル語学学会「モンゴル語とモンゴル人たちが書き遺した文化」
The Second International Conference on the Mongolian Linguistics
“The Mongolian Languages and Written Culture of the Mongolian People”

小　林　陽　子（愛媛大学）
KOBAYASHI Yoko（Ehime University）

2016年5月18日から21日にかけて、ロシア連邦カルムイク共和国エリスタのカルムイク国立大学で上記学会（Ⅱ Международная конференция по монгольскому языкознанию «Монгольские языки и письменная культура монгольских народов»）が行われた。

この国際学会は2013年10月にサンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー言語研究所が開催した国際学会Монгольские языки: История и Соверменность（モンゴル語：過去と現在）に続くもので、モンゴル語学に特化した学会である。前回は、同言語研究所所属のРыкин Павел Олегович博士が中心となり、8カ国（ロシア・モンゴル国・中国・フィンランド・ハンガリー・日本・スロバキア・スウェーデン）から30名弱の参加者があった。日本からは樋口康一教授（愛媛大学）、梅谷博之氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（所属は2013年当時））、報告者小林が参加した。エクスカーションやイベントは無かったが、参加者がひとつの部屋に集まりそれぞれの報告について意見交換するシンプルかつアットホームな雰囲気が大変印象的で、次回学会開催時にも是非出席したいと感じた。「3年に一度、開催できれば」とРыкин博士が語っていたとおり、今年の開催がエリスタに決まり、参加を申請した。

第二回目となる今回は、ロシア教育科学省など政府関係諸機関の後援のもと、サンクトペテルブルクロシア科学アカデミー言語研究所にカルムイク州立大学と内蒙古大学が共同開催するかたちで、報告者が予想していたよりも遥かに大掛かりな国際学会となった。

樋口教授と報告者小林はモスクワからヴォルゴグラードを経由して5月18日の夕刻、バスでエリスタに到着した。学会スタッフの出迎えでカルムイク国立大学の学生寮に宿泊することになった。驚いたことに我々は学会中この学生寮が学会参加者の宿泊先であることを学会スタッフに会って初めて知ったのだ。そのため予約していた宿泊施設を慌ててキャンセルしなければならないことになってしまった。学生寮といっても、真新しい清潔な建物に整った設備が施され、ゲストハウスと言われても遜色ないものである。周囲には殆ど建物らしいもののない場所に同じような建物が何棟か建てられており、そこだけが整備されて浮いている印象をもった。周辺を散策しているうちに、別棟の庭から、おそらく家族で留学している学生たちが子供たちを遊ばせていたのであろう楽しそうな声が聞こえてきた。夕食後、日が落ちると周辺は真っ暗になったが、今度は若者たちのにぎやかな声が聞こえてきた。おそらくカルムイク国立大学に留学している学生たちだろう。

5月19日の午前中にカルムイク国立大学に移動し、レジストレーションの後、開会式が行われた。前回はロシア語・英語・モンゴル語三言語併記のアブストラクトが用意されていたが、今回はロシア語で作成されたプログラムが配布された。参加者はプログラムに名前がある者だけで約140名であった。

開会式の後、ロシア・中国・モンゴル国・ドイツ・日本（計5カ国）の研究者による基調講演が行われた。日本からは樋口康一教授が “Remarks on the translating and revising process of Mongolian Buddhist works: the case of the Mongolian versions of *the Lotus Sutra*.” を報告した。

午後からはПроблемы монгольской филологии и исторической лингвистики（モンゴル文献学と歴史言語学の問題）とАктуальные проблемы современного монгольского языкознания（現代モンゴル語学の諸問題）の二つのセクションに別れ、各々の課題について発表、議論が行われた。報告者小林は後者のセクションで “How does a mixed language comes into being? A preliminary case study exemplified in Mongolian in Inner Mongolia” を発表した。

夕方からは文化プログラムが用意されていて《Бумбин орн》という民族村のような場所を訪れた。ゲルを案内してもらった後、劇場で馬頭琴をはじめとした民族楽器の演奏や子供たちによる伝統舞踊を見学した。

翌5月20日も前日に引き続きセクション別の発表が行われた。諸般の事情でこの日の午前中のセクション終了後、報告者はエリスタを発たなければならなかった。そのため、午後のセクションで発表された山田洋平氏（東京外国語大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員DC2）による “The conditional converb in Dagur” を聴講することは叶わなかった。エリスタからは往路と同様バスでヴォルゴグラードに戻り、更にモスクワから帰国の途に着いた。因みに報告者小林にとってモスクワはソビエト連邦末期の1990年以来の訪問となった。

先に述べたとおり、今回エリスタで開催された本学会には多くの支援がついた。次回は中国内蒙古自治区の呼和浩特市で開催されることが既に決定されているとのことである。同時に第一回学会のこぢんまりとした様子を思い出すと、どこか残念にも感じられるが、国際モンゴル語学会がより大きな学会となることは喜ばしいことである。

国際シンポジウム「日本人のモンゴル抑留とその背景」報告
The International Symposium “The Internment of Japanese in Mongolia and its Historical Background”

ボルジギン・フスレ（昭和女子大学）
Husel Borjigin（Showa Women’s University）

2016年5月28日、昭和女子大学国際学科主催、同大学、公益財団法人守屋留学生交流協会後援の国際シンポジウム「日本人のモンゴル抑留とその背景」が昭和女子大学80年館で開催された。同シンポジウムは、第2次世界大戦終結後の日モ関係を中心に、モンゴルに抑留された日本人に焦点をあて、抑留の背景や抑留に至るプロセス、帰還をめぐる国際関係と政治過程等を総合的に分析し、歴史の恩怨を乗り越えた日本とモンゴルの友好関係の経験から得られる知見の発見とその検討を目的とした。

昭和女子大学坂東眞理子理事長と金子朝子学長が挨拶と祝辞を述べた。李守・昭和女子大学教授、窪田新一・大正大学教授が司会をつとめ、田中克彦・一橋大学名誉教授、二木博史・東京外国語大学名誉教授、E. カタソーノワ（Katasonova Elena）・ロシア科学アカデミー主任研究員、富田武・成蹊大学名誉教授、G. ミャグマルサムボー（G. Myagmarsambuu）・モンゴル科学アカデミー歴史考古学研究所教授、フスレ・昭和女子大学教授等6名の研究者が報告をおこない、日本、モンゴル、ロシア、中国、韓国からの研究者70名あまりが参加した。

田中克彦の報告「日本人のモンゴル抑留の国際法上の根拠について」は、次の3点を中心に述べた。1. 日本人のモンゴル抑留は、いったい、どのような国際法上の根拠にもとづいていたのかを、モンゴルの立場から説明してほしい。2. モンゴルには軍人のみならず、民間人も連行されたことが知られている。その内、2名の女性が加わっていたが、彼女たちはモンゴルで働き、医療機関での教育にあたったことを誇りとしている。3. 日本とモンゴルの友好の観点から、ウランバートルの重要な建造物――劇場、大学、郵便局など――に、かれらの労働によるものであること記し、そのような背景のある歴史的記念物であることを明らかにしてほしい。

二木博史の報告「戦争、動員、戦後国家建設――日本人のモンゴル抑留の背景」は、モンゴルにおける独立の背景およびモンゴル・ソ連・日本の関係に注目しながら、日本人のモンゴル抑留について、次のように指摘した。満洲国とモンゴル人民共和国のあいだの軍事衝突（1935年のハルハ廟事件）の翌年に締結されたモンゴル・ソ連相互援助条約は、中華民国のつよい非難をあびたものの、ソ連軍にモンゴル進駐の法的根拠をあたえ、同時にモンゴル人民共和国に国際法上の独立の根拠をもあたえた。ヤルタ協定（1945年2月）のなかの、ソ連の対日戦参加に関する合意事項は、周知のように、外モンゴルの現状維持（status quo）を承認し、モンゴルの完全独立にみちをひらいたが、同時にソ連の防衛のために必要な、モンゴルの緩衝国家としての地位を永続化させるという目的も有した。ソ連の対日戦にはモンゴル軍も動員され、おもに蒙疆政権に駐留する日本軍と戦闘をおこなった。連合国がわにくわわり枢軸国（日本）とたたかったモンゴルは、主権国家としての行動をとる機会にめぐまれただけでなく、戦利品（捕虜）を獲得する権利をもえた。モンゴルの完全独立の是非を問う国民投票とおなじ時期に到着した日本人抑留者（モンゴルからみれば戦利品＝捕虜）は、モンゴル

の戦後の国家建設のために絶対的に必要な労働力であった。結果的に、日本の満洲国建設、蒙疆政権擁立は、一方ではモンゴルにおける大粛清の遠因になったが、他方ではモンゴルの独立と国家建設を間接的に支援した。

エレーナ・カタソーノワの報告「スターリンはなぜポツダム宣言第9項を破ったのか」は、1945年8月23日付国家防衛委員会決定9898ss「日本軍軍事捕虜の受け入れ、配置、労働使役について」が決定されたプロセスを検討した上で、次のことを強調した。日本人捕虜の運命を決めたのはやはり経済的要因であった。シベリアや極東地域では、豊富な地下資源を採掘し、近代的な産業を築かなければならなかった。ソ連指導部が掲げた経済目標と同じ目標が、当時ソ連と戦略的同盟国のうちの1つであったモンゴルへ送られた日本人捕虜に対しても追求された。

富田武の報告「モンゴルにおける日本人捕虜――比較」は、モンゴル政府の日本人抑留方針や収容所生活の実情を考察した上で、モンゴルにおける日本人抑留者の死亡率（約13％）は、ソ連（約10％）より高い理由について、次のように考えている。第1に、モンゴル当局の捕虜抑留未経験、第2に、1946年6月より労働時間を延長し、計画・ノルマ達成に捕虜を駆り立てたこと、第3に、食糧事情の悪さを改善できなかったこと、第4に、医療衛生業務の低水準である。

ボルジギン・フスレの報告「1945年の日本人のモンゴルへの移送」は、モンゴル諜報総局中央文書館や国防中央文書館の日本人捕虜に関する資料がまだ十分利用されていないことにより、1945年8、9月の日本人捕虜利用をめぐるモンゴルとソ連の交渉や、抑留者がモンゴルに移送されたプロセスなどについてはまだ十分検討するには至っていないと強調した上で、新たに発見された、移送途中に死亡した44名の日本人の死亡調書を検討し、次のことを指摘した。第1に、モンゴルに抑留された日本人の数は、モンゴル軍側がソ連軍からうけいれた日本人の数より少ない。その理由は移送途中で、病死した者や逃亡した者、ソ連領内および旧満洲国領内のソ連軍病院に残された者、自殺した人者などがおおくいたからである。第2に、日本人抑留者は中国から移送される時点ですでに赤痢などの病気にかかったものがいて、それが次第に悪化し、少なからぬ者が移送途中で赤痢などの病気あるいは栄養失調症でなくなった。この状況はモンゴルに入って最初の段階までに改善されなかった。第3に、モンゴル抑留の日本人の死亡率がソ連に抑留された日本人の死亡率よりも高かったことは、1945年後半の時点で、モンゴル国内でこれほどの規模の日本人抑留者をうけいれる体制がととのっていなかったこと以外に、敗戦国の捕虜に対する否定的な社会環境があったことが考えられる。

G. ミャグマルサンボーの報告「モンゴル・日本両国の関係とモンゴルに残された日本軍将兵の遺骨について」は、日本人・内モンゴル人のモンゴル抑留の背景をさぐり、下記のことを示した。第1に、戦争捕虜として、12,318名の日本人が1945年冬にモンゴルの平原にやってきたことは、悲劇であると同時に、モンゴル・日本両国の関係に新たなページを開く歴史的出来事であった。第2に、かれらがモンゴル人民共和国に2年間にわたって抑留され、都市建設の大事業に参加したことは、両国の国民がお互いの真の姿を理解し、さらにはお互いが歩み寄り親しくなる大きな変化のきっかけになった。彼らの建てた建築群は、時の流れによって朽ちはてようとも、この橋は決して朽ちることなく、両国国民の歴史に永遠に残るであろう。第3に、命を失った1,597名の遺体は、歴史の証人となり、モンゴルの平原に残された。しかし、歴史を振り返って見ると、日本人抑留問題および遺骨収

集をめぐって、二国間の関係が同時に話し合われ、両国の交流を発展させる新しい歩みが踏みだされていった。それは、1972年の外交関係樹立へと至ったのである。

本シンポジウムの成果をまとめた論文集は2017年2月に出版する予定である。

国際セミナー「モンゴル学における教育・研究の現状と将来」

“Монгол судлалын суурлалт, судалгааны өнөөгийн байдал, хэтийн төлөв” сэдэвт олон улсын семинар

中　嶋　善　輝（大阪大学）

NAKASHIMA Yoshiteru（Osaka University）

2016年8月19日（金）～21日（日）、ウランバートル市にて、国際セミナー「モンゴル学における教育･研究の現状と将来」が開催された。同セミナーは、モンゴル国立大学モンゴル研究所が主催し、モンゴル国教育文化科学スポーツ省と大統領附属モンゴル研究国家評議会が協賛した。セミナーの趣旨は、世界各国のモンゴル研究・教育を行う大学から研究者が一堂に会し、各大学のモンゴル研究の概要を紹介し合った上で、将来における協働を模索しようとするものである。なお、セミナーは全てモンゴル語で行われため、本稿もキリル文字による表記で記述する。

19日（金）：各国からのセミナー参加者は、13時からの開会に先立ち、先ず午前9時半からЖ.バトソーリ（Ж.Батсуурь）教育文化科学スポーツ大臣を表敬訪問した。引き続き10時20分には、Д.レグデル（Д.Рэгдэл）科学アカデミー主席副院長とＴ.ドルジ（Т.Дорж）社会学部門副部長を、また11時には、Ｐ.バトエルデネ（Р.Бат-Эрдэнэ）モンゴル国立大学学長を表敬訪問した。（以下、敬称略）

開会式は13時から、モンゴル国立大学中央棟の学問講堂（Эрдмийн танхим）にて挙行され、最初にＰ.バトエルデネ（モンゴル国立大学学長）が、続いてД.レグデル（科学アカデミー主席副院長）が開会のあいさつを述べた。続いて13時半よりД.ザヤーバータル（モンゴル国立大学モンゴル学院）と松川節（日本・大谷大学）が座長を務め、各大学・研究機関の発表が行われた。なお、各発表者に割り当てられた持ち時間は、およそ30分（質疑応答を含む）であった。

◆ Ц.ウヌルバヤン（Ц.Өнөрбаян）「モンゴル国立教育大学におけるモンゴル学」

◆ リ・ナランゴー（Ли Нарангоо）「オーストラリア民族大学におけるモンゴル学」

◆ Л.ボルド（Л.Болд）「科学アカデミー・言語文学院におけるモンゴル学」

◆ С.チョローン（С.Чулуун）「科学アカデミー・歴史考古学院におけるモンゴル学」

◆ П.デルゲルジャルガル（П.Дэлгэржаргал）「モンゴル国立大学におけるモンゴル学」

中休みを挟み、16時よりЛ.ボルドとビルタラン・アーグネシ（Бирталан Аагнеш, エトヴェシュ・ロラーンド大学（＝ブダペスト大学））が座長を務め、発表が続行された。

◆ マリア・ペトロヴァ（Мариа Петрова）「ロシア連邦サンクトペテルブルグ大学におけるモンゴル学」

◆ ジャルガル・バダガロフ（Жаргал Бадагаров）「ブリヤート大学におけるモンゴル学」

◆ ワン・ハオ（Ван Хао）「中華人民共和国 北京大学におけるモンゴル学」

◆ ウ・インジェ（Y Йин Жэ）「中華人民共和国 内モンゴル大学におけるモンゴル学」

20日（土）：午前の前半のセッションは9時より、Ц.ウヌルバヤン（モンゴル国立教育大学モンゴル研究センター）とアガタ・バレヤスタジンスカ（Агата Барэя-Стажиньска, ワルシャワ大学）が座長を務め、発表が行われた。

◆ 中嶋善輝／今岡良子（大阪大学）「日本国 大阪大学におけるモンゴル学」

◆ 岡田和行（東京外国語大学）「日本国 東京外国語大学におけるモンゴル学」

◆ 松川節（大谷大学）「日本国 大谷大学におけるモンゴル学」

午前の後半のセッションは、10時50分より、ワン・ハオ（Ван Хао, 北京大学）とマリア・ペトロヴァ（Мариа Петрова, サンクトペテルブルグ大学）が座長を務め、発表が行われた。

◆ 島村一平（滋賀県立大学）「日本国 滋賀県立大学におけるモンゴル学」

◆ リュー・ビョンジェ（Рюу Бён Жэ）「大韓民国 檀国大学校におけるモンゴル学」

◆ キム・ギソン（Ким Ги Сонь）「大韓民国 韓国外国語大学校におけるモンゴル学」

午後の前半のセッションは13時半より、中嶋善輝（大阪大学）とウ・インジェ（内モンゴル大学）が座長を務め、発表が行われた。

◆ ウルリク・ゴンザレス（Улрик Гонзалес）/ カルステン・フライド（Карстен Фрайд）「ドイツ連邦共和国ボン大学におけるモンゴル学」

◆ A.ガンチメグ（A.Ганчимэг）「ドイツ連邦共和国フンボルト大学におけるモンゴル学」

◆ ビルタラン・アーグネシ（Бирталан Аагнеш）「ハンガリー共和国ブダペスト大学におけるモンゴル学」

◆ ヴェロニカ・カピショフスカ（Вероника Капишовска）「チェコ共和国カレル大学におけるモンゴル学」

午後の後半のセッションは、15時40分より、岡田和行（東京外国語大学）とヴェロニカ・カピショフスカ（カレル大学）が座長を務め、発表が行われた。

◆ アガタ・バレヤスタジンスカ（Агата Барэя-Стажиньска）「ポーランド共和国ワルシャワ大学におけるモンゴル学」

◆ エリザベッタ・ラガグニン（Елизабетта Рагагнин）「イタリア共和国ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学におけるモンゴル学」

◆ ブライン・バウマン（Брайн Бауманн）「アメリカ合衆国バークレー大学におけるモンゴル学」

◆ フフバートル（昭和女子大学）「日本国 昭和女子大学におけるモンゴル学」

閉会の辞は、Д.ザヤーバータル（モンゴル国立大学モンゴル学院）が述べ、今後このようなセミナーが毎年各国の大学で持ち回りにより行えたらよいものだとの希望で締めくくられた。

21日（日）：見学旅行。9時にザローチョード・ホテルに集合し、各国からの発表者と、モンゴル国立大学の教師らが複数の自動車に分乗し、郊外にあるチンギス・ハーン像テーマパークと、ハーン・ジムズ・ツーリスト・キャンプを訪問した。相互に親交を深め、20時過ぎにザローチョード・ホテルに戻り、セミナーの全日程が終了した。

偉大な作家ダシドルジーン・ナツァグドルジ生誕110周年記念国際学術会議
International Scientific Conference Devoted to the 110th Birth Anniversary of the Great Writer Dashdorjiin Natsagdorj

岡　田　和　行（東京外国語大学）
OKADA Kazuyuki（Tokyo University of Foreign Studies）

2016年11月17日（木）、「偉大な作家ダシドルジーン・ナツァグドルジ生誕110周年記念国際学術会議」（モンゴル語ではИх зохиолч Дашдоржийн Нацагдоржийн мэндэлсний 110 жилийн ойд зориулсан олон улсын эрдэм шинжилгээний хурал）がモンゴル国トゥブ県の県都ゾーンモドで開催された。ダシドルジーン・ナツァグドルジ（以下、D.ナツァグドルジと略記）は1906年11月17日にトシェートハン部ダルハン親王旗（現在のトゥブ県バヤンデルゲル郡）に生まれ、1937年7月13日にウランバートルで夭逝した。会議は教育文化科学スポーツ省、科学アカデミー、トゥブ県議会・知事公室の3機関が共催し、午前9時30分から、トゥブ県庁前中央広場にあるD.ナツァグドルジの「史詩」（1936年発表）の有名な一節「成長しつつ学んだ民族のことばは　捨ててはならぬ文化／命尽きるまで居る生まれ故郷は　離れてはならぬ国」がモンゴル文字で刻まれた記念碑の前で献花式典が行われた。午前10時から、県庁大会議室で行われた開会式では、Yo.オトゴンバヤル（Yo. Otgonbayar）教育文化科学スポーツ省副大臣（D.ナツァグドルジ生誕110周年記念委員会議長）、D.レグデル（D.Regdel）科学アカデミー総裁、J.バトジャルガル（J.Batjargal）トゥブ県知事、D.ドンドグ（D.Dondog）トゥブ県議会議長ら来賓が祝辞を述べた後、L.ボルド（L.Bold）科学アカデミー言語文学研究所長が議長、B.ムンフバヤル（B.Munkhbayar）同研究所研究員が書記をつとめ、S.バイガルサイハン（S.Baigalsaikhan）同研究所文学部門長の基調講演「モンゴル文学研究にD.ナツァグドルジ研究が占める位置と今後の課題」を皮切りに本会議が始まった。（以下、敬称略）

午前の前半のセッションでは、国立ウランバートル大学の文化功労者D.ツェデブ（D.Tsedev）の「不完全な形で出版されてきたD.ナツァグドルジの2編の詩を手稿から復元し精読する」、モンゴル国立大学のZ.ロンジド（Z.Lonjid）の「モンゴル人の儀礼とD.ナツァグドルジ」、科学アカデミー歴史学考古学研究所のCh.バトドルジ（Ch.Batdorj）の「科学委員会とD.ナツァグドルジ」、岡田和行（K.Okada）の「D.ナツァグドルジの詩『わが故郷』と『史詩』の関係の諸問題」の4本の発表があった。

午前の後半のセッションでは、内モンゴル社会科学院文学研究所のトゥムルジン（Tumurjin）の「近代モンゴル文学の古典的形式の完成者D.ナツァグドルジ」、ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究所のE.V.スンドゥエワ（E.V.Sundueva）の「D.ナツァグドルジの翻訳した〔プーシキンの〕小説『スペードの女王』におけるトランプ札の名称について（ブリヤート語の翻訳との比較）」、モンゴル国立教育大学のD.オヨーンバドラフ（D.Oyunbadrakh）の「D.ナツァグドルジとモンゴル近代児童文学」の3本の発表を聞いた。

昼食後の午後の前半のセッションでは、教育研究所のD.バトトグトフ（D.Battogtokh）の「D.ナツァグドルジのいくつかの詩作品の人物形象の観察」、科学アカデミー言語文学研究所のD.ツェヴェーンドルジ（D.Tseveendorj）の「D.ナツァグドルジの作品のいくつかの英訳のバージョンの比較観察」、

内モンゴル芸術学院のサランゴア（Sarangua）の「D.ナツァグドルジ、S.ボヤンネメフ、Sh.アヨーシの戯曲作品の比較」、モンゴル国防大学のI.チンバト（I.Chinbat）の「人民軍の啓蒙家D.ナツァグドルジ」、国際遊牧文明研究所のA.オチル（A.Ochir）の「D.ナツァグドルジの作品の隠された題名と新発見の若干の作品」、元科学アカデミー言語文学研究所のR.ナラントヤー（R.Narantuya）の「D.ナツァグドルジの生涯と作品に関する評価と結論」、モンゴル国立教育大学のS.フブスグル（S.Khuvsgul）の「真実の愛をめぐる永遠の歌声」、ブリヤート国立大学のL.Ts.ハルハロワ（L.Ts.Khalkharova）の「D.ナツァグドルジの短編小説『お坊さまの涙』における隠されたモチーフを民衆の笑いの文化の領域で取り上げて見る」の8本の発表があった。

午後の後半のセッションでは、ゴルバン・エルデネ師範大学のCh.ジャチン（Ch.Jachin）の「ナツァグドルジ研究を重視する理由」、内モンゴル社会科学院モンゴル言語文字研究所のブレンビレグ（Burenbileg）の「ラテン文字の作成と使用に関するD.ナツァグドルジの考え方をめぐって」、国立ウランバートル大学のA.ムンフオルギル（A.Munkh-Orgil）の「ナツァグドルジの一つの試み―バージョン」、東シベリア文化芸術大学のM.V.アムガラノワ（M.V.Amgalanova）／Yu.F.プロコピエワ（Yu.F.Prokopyeva）の「D.ナツァグドルジとバザル・バラーディンの作品における叙情詩の伝統」、モンゴル国立大学のD.バトジャルガル（D.Batjargal）の「偉大な作家D.ナツァグドルジはモンゴル近代児童文学の韻文の基礎を築いた人物である」、モンゴル国立大学のR.ビゲルマー（R.Bigermaa）の「D.ナツァグドルジの韻文の刷新」、内モンゴル芸術学院のサリナ（Sarina）の「1940年代以降の内モンゴル文学の研究と批評の刷新」、科学アカデミー言語文学研究所のO.シネバヤル（O.Shinebayar）／J.オーガンバータル（J.Uuganbaatar）の「D.ナツァグドルジの時評と随筆について」の8本の発表を聞いた。

すべての研究発表が終了した後、プログラムでは総括討論の時間が組まれていたが、時間の関係で結局行われなかった。全体に発表本数が多かったせいか、発表時間は1人10分間で、しかも発表レジュメ集が事前に配布されなかったので、発表の概要を一つ一つお伝えできないことをお詫びしたい。書記のB.ムンフバヤルによれば、本会議の発表論文集は今後出版される予定とのことで、発表者には速やかな原稿提出が求められた。最後にL.ボルド議長が閉会の辞を述べて会議は終了した。会議終了後、トゥブ県にあるモンゴル・クウェート研究センターで知事主催の盛大な歓迎会が行われた。会議参加者は夜遅くまで歓談に興じ、散会後は吹雪の中を徐行運転する車に乗り、日付が変わってからウランバートルのホテルに無事帰還した。

なお最後に、2016年のD.ナツァグドルジ生誕110周年を記念して、D.ツェデブ監修の2巻本の『D.ナツァグドルジ全集』、Ch.ジャチン監修の2巻本の『D.ナツァグドルジ作品集』、トゥムルジン監修の3巻本の『D.ナツァグドルジ全集』（2006年ウランバートル刊の3巻本『D.ナツァグドルジ全集』に準拠したモンゴル文字版の全集でフフホトの遠方出版社刊）、A.オチル／G.ダシニャム共著の『D.ナツァグドルジ―その生涯と事跡』（1996年刊の増補改訂第2版）、D.ツェデブ著のナツァグドルジ関係論集『偉大なナツァグドルジの繋がらない真珠の糸の切れ端（Их Нацагдоржийн хэлхээгүй сувдын учиг）』などの貴重な図書が出版されたことを申し添えておきたい。

国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト
――考古学・歴史学から見た「海域アジアのモンゴル襲来」を中心として」
The International Symposium “Mongolian Impact on Eurasia: Archaeological and Historical Perspectives of the Mongol Invasion”

四日市　康　博（昭和女子大学国際文化研究所）
YOKKAICHI Yasuhiro（Institute of International Culture, Showa Women's University）

2016年12月10日、11日、昭和女子大学国際文化研究所が主催した国際シンポジウム「ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト――考古学・歴史学から見た「海域アジアのモンゴル襲来」を中心として」が昭和女子大学（東京）で開催された。本シンポジウムはいわゆる「モンゴル襲来」（蒙古襲来、元寇）をモンゴル・インパクトの一環として捉え、多角的な視点からの検証を目的とした、世界でも初の試みであった。「モンゴル・インパクト」とは聞き慣れない言葉かもしれないが、従来から言われてきた分析概念である「パクス・モンゴリカ」（Pax Mongolica, モンゴルの平和）に対応する概念である（「モンゴル・インパクト」に関しては、以下の論文でも言及している：YOKKAICHI, Yasuhiro, “The Maritime and Continental Networks of Kīsh Merchants under Mongol Rule: The Role of the Indian Ocean, Fārs and Iraq.” *Journal of Economic and Social History of the Orient*, 2017（in print））。周知のとおり、「パクス・モンゴリカ」とはモンゴル帝国覇権下での東西交通の安定を指す概念であるが、モンゴル帝国期の東西交流の活況やそのメカニズムが全てこの概念のみで説明できるわけではない。また、政治的・社会的に平和的な状況が出現したとの誤解を生じさせがちであるが、そのような事実もない。つまり、「パクス・モンゴリカ」とは極めて一面的な状況のみを表す概念なのである。しかし、「パクス・モンゴリカ」単独ではなく、「モンゴル・インパクト」（モンゴルの衝撃）という分析概念と対として考えることで、ユーラシアの東西交流をより多角的・多層的に理解することが可能となる。モンゴル帝国はユーラシアに安定のみをもたらしたわけではなく、むしろ各地域の政治・経済・社会・文化に様々な衝撃がもたらされることによって、それが交流を誘発したと考えられるからである。この場合の「モンゴル・インパクト」とは、単にモンゴル軍の軍事的侵攻や外交使節・ダルガチ派遣による政治的な干渉のみを意味しない。東西ユーラシア交流の活況をもたらした要因となったのはそのような短期的インパクトではなく、むしろ、経済的・文化的なインパクト、すなわち、長期的インパクトであった。以上のような前提に立って「モンゴル襲来」を見直すと従来とは全く違った歴史像が見えてくる。これまでのモンゴル襲来研究はいずれもモンゴル帝国＝元朝と日本の軍事的衝突、或いはそれに先立つ外交関係を扱ったものがほとんどであった。しかし、長期的なモンゴル・インパクトに着目した本シンポジウムでは、軍事衝突そのものよりもそれを包括する形での経済・文化的交流に主眼を置いた研究発表が主体となってモンゴル襲来のみならず、モンゴル・インパクトと各社会におけるレスポンスについて検討がおこなわれた。この点は、本シンポジウムの特色であり、従来の研究とは一線を画する画期的な視点であるといえる。また、言うまでもなく、「モンゴル襲来」とは日本にだけ生じた歴史事象ではなく、海域アジア全体、さらにはユーラシア全体に及ぶ歴史事象であった。したがって、本シンポジウムでは、近年考古学調査が進められつつあ

るベトナムをはじめとして、数カ国にわたる多様な国籍の研究者に様々な観点から報告いただいた。しかしながら、二度にわたって直接モンゴル帝国＝元朝から侵攻を受けた日本においては他地域よりも「モンゴル襲来」に対する歴史学・考古学研究の蓄積が多いのもまた事実である。そのため、本シンポジウムでは、「モンゴル襲来」に対する日本国内の研究蓄積を踏まえつつ、日本以外における最新のモンゴル襲来研究の成果と対比させることによって新たなモンゴル襲来研究の確立を試みた。本シンポジウムの各セッションの報告者とタイトルは以下のとおりである：

問題提起（四日市康博・昭和女子大学非常勤講師）
第1部：日本のモンゴル襲来研究最前線　　司会（山岸良二・昭和女子大学）
1-1. 蒙古襲来時期の博多遺跡群（田上勇一郎・福岡市埋蔵文化財課
1-2. 陶磁器から見た蒙古襲来（森達也・沖縄県立芸術大学）
1-3. 蒙古襲来研究における新知見（中村翼・大阪大学）
第2部：海域アジアのモンゴル・インパクト　　司会（菊池誠一・昭和女子大学）
2-1. 東南アジア諸国のモンゴル・インパクトとそのレスポンス（Mongol Impact and Social Response in Southeast Asia）（Francesca Fiaschetti・Hebrew University of Jerusalem）
2-2. 陳朝考古学から見たベトナムのモンゴル襲来（Dang Hong Son・Vietnam National University, Hanoi）
2-3. 海事考古学から見たベトナムのモンゴル襲来（木村淳・東海大学）
2-4. モンゴル帝国のサハリン島への進出とアイヌ（中村和之・函館工業高専）
第3部：モンゴル・インパクトの背景　　司会（フフバートル・昭和女子大学）
3-1. ビザンツ帝国におけるモンゴル・インパクト（Mongol Impact at the Black Sea region）（D.Bayarsaikhan・National University of Mongolia）
3-2. モンゴル覇権下における中国とイランの海域通交（蒙古霸权下元朝与伊利汗国的海路联系）（党宝海・北京大学）
3-3. 高麗におけるモンゴルのインパクトとレスポンス（Mongol Impact and Social Response from the perspective of Koryeo）（李康漢・韓国学中央研究院）
第4部：モンゴル・インパクトによる歴史認識の変容　　司会（四日市康博）
4-1. 日本におけるモンゴル襲来に対する認識（Li.Narangoa・National University of Australia）
4-2. ベトナムにおけるモンゴル襲来と歴史変容（Nguyen Van Kim・Vietnam National University, Hanoi）
4-3. モンゴル国における元朝認識とフビライ像（A.Punsag・Mongolian Academy of Sciences）
全体討論
コメント（向正樹・同志社大学、郭万平・浙江工商大学、S.Chuluun・Mongolian Academy of Sciences）

第1部では、考古学・陶磁学・日本史の専門家によって日本におけるモンゴル襲来研究の従来の見解と最新の知見を提示してもらい、モンゴル襲来に関しては世界でも最も資料と研究が充実してい

る日本の事例をもって他地域の指標とすると共に、海域アジア・ユーラシアといったより大きな視点から日本の研究を見た場合の従来の研究の限界点について検討をおこなった。また、第2部では枠組みを海域アジア全体に広げ、近年本格的にモンゴル襲来に関わる考古学発掘がおこなわれているベトナムの事例に関して、白藤江の調査成果や新出史料の紹介なども交えながら報告がおこなわれ、さらには東南アジア全体におけるモンゴル・インパクトと東北アジア、特にサハリンにおけるモンゴル・インパクトの事例に関して専門家による報告がなされた。第4部では、モンゴル・インパクト発生の背景を検討するために、インパクトの発生元であるモンゴル帝国＝元朝史の専門家による元朝とイランの交流、モンゴルの支配を通して直接モンゴル・インパクトを受け、一方では日本にモンゴル・インパクトをもたらす一因となった高麗の状況、さらには、西方ユーラシアにおけるモンゴル・インパクト、特にモンゴル帝国とビザンツとの関係におけるモンゴル・インパクトに関して、それぞれ最新の研究状況が報告された。一方、第4部では同時代史的研究に限定せず、モンゴル・インパクト以降から近現代に至るまで、インパクトを受けた現地社会のレスポンスがどのように変化し、それがどのように歴史認識やナショナリズムに影響を与えたのか、または利用されたのかという観点から、日本・ベトナム・モンゴルの事例に関してそれぞれ報告がおこなわれた。以上のように、非常に広い視点から多岐にわたる地域の諸問題が提示され、従来のような単なる軍事衝突や外交関係という観点のみならず、モンゴル襲来という形で表面化したモンゴル・インパクトがそれぞれの地域・社会にどのような長期的影響を与えたのかという点に主眼が置かれた上で報告・議論がおこなわれた。そのため、全体討論はおよそ三時間にわたっておこなわれたにもかかわらず、全ての問題を議論するには至らず、むしろ今後の研究課題としてどのような論点があるのかが浮き彫りとなる結果となった。今回、第1部から第4部までそれぞれのセッションに分かれて検討されたテーマは本来、個別のシンポジウムやワークショップでより深く検討されるべき問題であり、その意味でも、本シンポジウムは新たな視点によるモンゴル・インパクト研究の出発点に過ぎず、今後、さらなる共同研究が望まれる。本シンポジウムには正式に招聘した国内外の報告者以外にも、ベトナム史・モンゴル史・元朝史（中国史）・日本史・考古学・陶磁学などの第一線の研究者の参加が国内外から数多くあったが、惜しむらくは、全体討論で各人の意見を汲む時間的余裕が無かったことである。とはいえ、参加者から今回の試みに対して概ね高い評価を得ることができ、引き続き、続編となるシンポジウムの開催を望む声も多く寄せられた。なお、シンポジウム翌日には、参加者および有志による鎌倉モンゴル襲来関連史跡の巡見がおこなわれ、円覚寺（仏日庵）、鶴岡八幡宮、名越切通（三浦道）、まんだら堂やぐら群、由比ヶ浜（古戦場跡）、龍ノ口刑場跡（龍口寺／龍口神社）、元使五人塚（利生寺跡／常立寺）、高徳院（鎌倉大仏／関東大仏寺社料唐船）をめぐり歩いた。特に、元使五人塚はモンゴル人参加者から好評であった。今回のシンポジウムの成果は、2017年度中に日本語版の論集として単行本が刊行される予定であり、また、その後、引き続いて英語版も刊行される予定である。